

# 九大三景

六本松 箱崎 伊部



▷2◁

キャンパスから歩くこと約5分。福岡市中央区輝国の住宅地にやってきました。作家の片山恭一さん(49)が教養課の1年間を暮らした下宿はこの先にある。ことはいえ30年も昔のこと。辺りの様子は一変している。片山さんは、古そうな家のインナーホンを押しは「近くにNさんはお住まいじゃないですか？」と、大家さんの名前を尋ねて回った。数軒目で大家さんを知る女性が見つかった。いわゆる「その角の店の二つ隣。でも、

もうお亡くなりになったと聞いたけど……」教えられた先は、築10年にも満たないような白壁の2階建てアパが住んでいた。コンロ、木造住宅があった。1階に大家さん家族、2階の四つの3畳間に片山さんら4人の九大学生が住んでいた。コンロ、植物学の研究者を志して農学部に入った片山さんだったが、次第にアカデミズムに距離を感じ始める。やがて「自分が書いたものがどういうレベルか知りたくて」応募した「気配」が文学界新人賞を受賞。27歳の時だ。その後、なかなか世に作

品を送り出せない日々が続いたこと。一方で、良き家族や出版編集者に恵まれたこと。出

## 3畳間に濃密な記憶

山さんだったが、次第にアカデミズムに距離を感じ始める。やがて「自分が書いたものがどういうレベルか知りたくて」応募した「気配」が文学界新人賞を受賞。27歳の時だ。その後、なかなか世に作

品を送り出せない日々が続いたこと。一方で、良き家族や出版編集者に恵まれたこと。出

「お前の方が間違っている」「お前の方が間違っている」なんて、すぐに色気のない議論に走ったものです」

「A室の住人はギターを弾いてる。3月、この建物も

目を繰り込んで生きてないんでね。僕にとって大学ってそんな場所」

### 片山恭一さん

①

「言葉で表現することが楽しかった」と片山さん



徳野仁子撮影